

家庭科の男女共修をすすめる会

# 会報

'97 春  
最終号

連絡先 (三月三十一日まで)

東京都渋谷区代々木2-21-11

婦選会館

〒151

振替 〇〇一九〇―一九一八九一

発行 一九九七年三月二十九日

## 家庭科の男女共修をすすめる会は

## 解散します

全国の中学・高校での家庭科の男女共修は実現しました。

共修は、もうあたりまえのこととして、一般に受け入れられていると言えましょう。さまざまな立場の人びとの力を広く集めて共修を求める運動は、目的を遂げました。

家庭科の男女共修をすすめる会は、一九九七年三月三十一日をもって解散します。

長い間のご協力、ありがとうございました。

運動はこれからも必要です。

共修がしっかり実施されるよう、関係者への働きかけは続けなければなりません。

家庭科の内容は、もっと充実させなければなりません。

教育全体について、もっと男女平等をすすめるなければなりません。

伝統的な男女の役割分担意識をなくす努力は、もっと続けなければなりません。

そうした目的のために、新しく、ちえと力を集めなければなりません。

どうぞ皆様がそれぞれのお立場で、ちえと力を出してくださいように。

世話人会

### もくじ

家庭科の男女共修をすすめる会は

解散します……………(1)

新しい本をどうぞ……………(2)

家庭科教育の一層の充実を要望……………(3)

家庭科をめぐる動き……………(5)

高校長協会家庭部会と文部省は今……………(6)

'96年度会計中間報告……………(7)

この「プラン」を生かそう！……………(8)

半田たつ子さんに「エイボン教育賞」……………(9)

「エイボン教育賞」をいただいて……………(10)

NHK「おしゃれ工房」に出演して……………(11)

連絡会報告……………(12)

世話人会報告……………(13)

これから——世話人の声——……………(14)

参加なさいませんか……………(17)

おしらせとお願い……………(20)

どうぞこれからも

お元気で！

## 新しい本をどうぞ

読んで下さい、広めて下さい  
家庭科共修運動を検証するために  
私の、あなたの本なのです

半田たつ子

一九七四年一月二十六日、「家庭科の男女共修をすすめる会」が発足してから、一三三年。落胆の淵に引きずりこまれた日、連帯の温もりに浸った日、怒り心頭に達した日、ルンルン飛び上がって喜んだ日。まさに走馬灯のように浮かぶ様々な場面……。朝日新聞で「今こそ家庭科」シリーズを担当した上丸洋一記者が「理念をめぐる闘いで勝利した希有な例」と言ったのを、思い出します。

共修運動はどうして勝利したのか？ 私達自身がこの運動を検証し、今の、これからの運動に寄与したい。それには運動の全貌を明らかにすることが求められます。

一九九六年四月六日、総会・集会の後の一年間を、「しめくくりの年」とし、運動を総括する本を出版することを決めました。首都圏の世話人十人が執筆者兼編集者となって半

年、八月には合宿もしてがんばり、予定の期日に原稿を仕上げました。  
最後の単行本の概要は次の通りです。

家庭科の男女共修をすすめる会編

「家庭科、男も女も！」

— こうして拓いた共修への道 —

B5判 三段組 二四〇ページ

ドメス出版 千部刊行

### 目次

I 会は、どう道を拓いたか

一 男女共修はこうして決まった

— 運動の流れ —

二 私たちは何を学び何を提起したか

— 五二回の集会で —

三 会は何を働きかけたか

(出版活動、要望書、訪問、アンケートなどを含む)

II 時代はどう動いたか

一 教育をめぐる

二 女性の状況をめぐって

三 他団体の支援・協力

四 男女共修、国会の中で

五 マスメディアは男女共修をどう伝えたか

III 資料・年表

※ 運動と私 (世話人のうち16人の一言)  
※ おわりに

できるだけ写真を入れ、親しみ易く、しかも歴史の証言となるように願いました。一つの要望書にも時代性があり、割愛は忍びなかつたのですが、値段の関係上、資料は年表と共に最少限にとどめました。求め易い定価になるように、パンフレットの益金や、エイボンの賞金も注ぎこみました。

発行は三月三十一日、定価は二千五百円で外税、会員だとはつきり言ってくだされば送料はサービスになります。半分は各地の女性センター、大学や公共の図書館など大勢の人の目に触れ、活用度の高いところに会から寄贈しますので、販売するのは僅か五百です。売り切れにならないうちに、あなたの運動の記念碑としてお求め下さい。お仲間にもぜひ勧めて下さいますように。

ご注文は直接ドメス出版にお願いします。

〒170 東京都豊島区駒込1-3-15

ドメス出版

☎ 03-3944-5651

FAX 03-3944-3559

次の教育課程に向けて

## 家庭科教育の

### 一層の充実に要望

皆様ご存じのように、昨年六月の中教審答申を受けて八月に新しい教課審がスタート、「ゆとり」と「生きる力」をキーワードに、次の教育課程に向けて審議をすすめています。

「男女共同参画二〇〇〇年プラン」(8ページ参照)では、「家庭科教育の充実」が大きく取り上げられていますが、全体として授業時間の大幅削減が予想され、「家庭科が選択になるのでは」と危ぶむ声も聞かれます。

「会」では十月(教課審あて。下)と二月(首相、文相あて。次ページ)に要望書を出して家庭科教育の一層の充実に求めました。

また一月には、文部省が「今後の教育の在り方について」の意見を募集しましたので、世話人ひとりひとりが意見を提出、男女平等教育を推進すること、男女平等教育推進担当者(学校等に置くこと、「技術」と「家庭」は別教科とすること、家庭科教育を一層充実させることなどを要望しました。(梶谷典子)

1996年10月1日  
家庭科の男女共修をすすめる会  
世話人代表 近江眞理

## 要 望 書

新しい教育課程について、次のことを要望いたします。

### 要 望 事 項

小学校、中学校、高等学校を通して、家庭科教育を一層充実させること。

#### 理 由

- 1、生活についての知識、技術及び生活を通して考えることを学ぶ家庭科は、「生きる力」に最も直接的にかかわる基本的な教科です。自ら学び、自ら考える力などをはぐくみ、創造性を育て、個性を生かし、豊かな人間性を育てることができます。
- 2、現在の社会での大きな問題である、高齢者の福祉や環境の問題、男女共同参画の問題などを考えるためにも、家庭科はこれからもっと重要視されなければなりません。

(縮小コピー)

## 要 望 書

橋本総理大臣が21世紀を展望して、六大政治改革の一つに教育改革を挙げてお取り組みのこと、大変心強く存じます。その意気込みを具体的な教育課程に生かすために、いま教育課程審議会が作業をすすめておられること、私達は大きな期待と関心を寄せています。さて、内閣総理大臣が本部長で、各大臣が本部員である男女共同参画推進本部は、昨年12月13日、「男女共同参画2000年プランー男女共同参画社会の形成の促進に関する平成12年（西暦2000年）度までの国内行動計画」を策定されました。

策定の経過は、第四回世界女性会議で採択した「行動綱領」や、市民やNGOの意見を取り入れた男女共同参画審議会の「男女共同参画ビジョンー21世紀の新たな価値の創造」を基本にしているという点で、これまでの国内行動計画以上に意義深いものと思います。

そこには「男女平等を推進する教育・学習」の具体的施策として、「ア初等中等教育の充実」のために「家庭科教育の充実」が特筆されています。すなわち

「家庭科教育については、平成元年3月改訂の学習指導要領に基づき、男女が協力して家庭生活を築いていくという視点に立って教育内容の改善・充実に努めるとともに、高等学校の家庭科については、社会の変化や女子差別撤廃条約の批准に対応するため、平成六年度新入生より男女ともすべての生徒に履修させるよう改善したところであり、その趣旨の徹底や教員研修の充実、施設や設備の整備・充実等に努める」とあります。

中央教育審議会は、先に子供に「生きる力」と「ゆとり」を、と強調されましたが、私達は、これこそ男女で学ぶ新しい家庭科がめざすものと受けとめました。未だに過去の家庭科のイメージを拭いきれない人もいますが、「2000年プラン」の精神を、教育課程改訂にかかわっておられる委員諸氏に、周知徹底していただけますよう要望します。

1 社会の変化や女子差別撤廃条約の批准に対応するため、改善したばかりの高等学校家庭科は、その趣旨の徹底のため、新教育課程でも、男女ともすべての生徒に履修させ、いっそう充実させるよう要望します。

2 中学校技術・家庭科は、1の趣旨に加え、技術と家庭は各々性格を異にするところから二教科に分離し、男女ともすべての生徒に履修させるよう要望します。

1997年2月12日

家庭科の男女共修をすすめる会 世話人代表

半田 たつ子

内閣総理大臣・男女共同参画推進本部長

橋本 龍太郎 殿

文部大臣・男女共同参画推進本部員

小杉 隆 殿

(縮小コピー)

## 家庭科をめぐる動き

○大量不合格が出た高校家庭科の異常な検定  
全教の教研集会の家庭科教育分科会レポートによれば、一九九六年検定の高校家庭科では四点の不合格があったと出版労連（日本出版労働組合連合会）から報告されているので、次に紹介する。

一九八二年度実施の指導要領下での「家庭一般」の検定は、八〇、八三、八六、八九年と四回行われたが、不合格はそれぞれの年で多くても一点で、不合格なしの年もあった。

男女共修が実現した一九九四年度実施の指導要領下での「家庭一般」の検定は、九二年と九六年と二回行われた。九二年の検定では、六社八点の申請中、一点の不合格が出た。この一点は初めから不合格であったわけではなく、検定意見が多すぎて修正を断念し、結果的に不合格となったものである。

今回九六年の「家庭一般」の検定では、六社九点の申請中三点もの不合格が出た。この三点はいずれも新刊である。

また、「生活一般」の検定でも一点の不合格が出た。これも前記不合格の「家庭一般」と同じく新刊である。

○高校の必修「家庭科」の単位数の削減が、

文部省の「規制緩和推進計画」の対象

文部省は一月一七日、政府が昨年三月の閣議で決めた「規制緩和推進計画の改定」に基づいて各方面からの意見、要望に対する見直し、検討状況を中間的にまとめたものを公表した。高校の必修家庭科の単位数削減がこの計画の対象になっている。その検討状況を「内外教育」誌より紹介したい。

〈制度の概要〉高等学校の「家庭科」は、高等学校学習指導要領に基づき男女とも四単位数と定められている。（学校教育法第四十三条、同法施行規則第五七条の二、同六三条の二、高等学校学習指導要領）

〈検討状況〉現行制度については、男女ともに人生八十年時代を生き抜く生活力を身に付け、豊かな家庭生活を築くために必要な知識・技術を習得することができるようになるため、八九年三月高等学校学習指導要領の改訂を行い、家庭科をすべての生徒に四単位数修させることとしたものである。

なお、教育課程の基準については、九六年八月に諮問した教育課程審議会において検討を行っているところであり、家庭科の単位数がどうあるべきかということについては、その一環として検討が行われるべきものであり、今の時点でその方向性を示すことは困難。（その他）

○全国高P連は、教課審の総会のヒアリングで、高校家庭科の選択・二単位に減らすべきと主張（「内外教育」より）

教育課程審議会（教課審）は、一月二三日総会を開き、教育関係団体や教職員組合など一八団体の代表から、教育課程のあり方をテーマに意見を聴取した。各団体は、今後の教育のあり方、各教科等における教育内容の厳選・改善、その他改善を要する事項、などについて意見をのべている。

その中の教科内容の厳選・改善について、全国P連は、高校家庭科は必修でなく選択科目とし、単位数も二にすべきとのべている。教育内容をめぐっては、基礎・基本の徹底と思いきった見直しを求める意見が目立ったということである。

なお、ヒアリング出席団体は以下のとおり。  
全国連合小学校長会、全日本中学校長会、全国高等学校長協会、全国国公立幼稚園長会、全国特殊学校長会、全日本私立幼稚園連合会、日本私立小学校長会、日本私立中学高等学校連合会、都道府県教育長協議会、全国市町村教育委員会連合会、日本PTA全国協議会、全国高等学校PTA連合会、日本教職員組合、全日本教職員組合、全日本教職員連盟、日本高等学校教職員組合（右派）、国立大学協会、経済団体連合会（大西 歩）

# 高校長協会家庭部会と

## 文部省は今

一、全国高等学校長協会家庭部会は、「会報第八七号」（平成八年五月）によると、学校完全週五日制に向けての中教審、教課審の審議に関して、「家庭科男女必修の意義が十分生かされる教育課程にするよう強く要望したい」とし、また、同会調査で明らかになった「老朽化した施設・設備の更新、男子生徒にも適合する設備、狭隘な実習室の改善、実習における班別学習の導入などの諸条件の整備・拡充に取り組むこと」が平成七年十月総会で理事長挨拶の中で語られた。また富山県家庭科教育振興会会長は、北京の「世界女性会議NGOフォーラム」に参加し、「平等・開発・平和をテーマに、女性の地位向上のために、男女が共に人間として尊重しあう、男女共生社会の実現を図ることが最も必要としており、そのことに取り組む世界的潮流に胸をあつくして帰富した」と述べ、社会的状況の変化で家庭も変化せざるを得ない、それに伴って家庭科教育の内容も変化していると同総会で語っている。

平成八年五月の研究協議会では、学習指導要領の次期改訂について、普通教育の家庭科

について次の要望を検討している。①小中高の一貫した教育 ②男女必修と専門教育における目標の違いの明確化 ③四単位確保、等。

二、全国高等学校長協会家庭部会「会報第八七号（平成八年五月）および第八八号（平成八年十一月）」によると文部省が家庭科の履修が困難な学校について調査をしたところ、平成七年度入学生が卒業までに家庭科の四単位履修が困難な学校は、公立高校では、三・三六％、私立については、二一・八五％が履修困難と回答した。公立におけるその理由は、一四〇校中一三〇校が、資格取得のためとし、残り十校は、施設・設備が整わないためと回答した。私立においては、施設・設備の関係や教員配置があげられているが、前年度が、三六％であったので、徐々に取り組まれていると見ている。もっとも履修の多い科目は、「家庭一般」で、七七・八％、「生活一般」が一七・二％、「生活技術」は一・七％であった。

資格取得のために四単位の履修が困難な点に関連して、河野教科調査官は「工業科の家庭科の一単位減については弾力的に考えることも可としたが、これは資格取得に関わりやむを得ないものについてということで、平

的、創造的な教科であるといえる。」と述べている。また、河野教科調査官は「完全週五日制を前提とした場合、学校、地域の役割に家庭科ということがでてこないのである。家庭の教育力の低下から学校教育の家庭科を見直すということの中で家庭科は男女必修となつたのである。……行政の継続性について考えたい。教課審で検討しているようなこと

が、すでに中教審で述べられているということとは今後どのような形で教育課程審議会を動かして学習指導要領を改訂していくのか大変不安に思うところである。……この際に家庭科が人間が人間らしく生きるための教科であることを各方面で紹介、アピールしていただきたい。」とまだまだ中教審・教課審への働きかけが必要であることを述べた。（岩谷薫）

## 1996年度会計中間報告（2月5日現在）

榎本稲子

### 収入の部

項 目	決 算 額	予 算 額	比 較 増 減
前 年 度 繰 越	112,317	112,317	0
会 費	401,500	440,000	△38,500
集 会 参 加 費	129,000	100,000	29,000
雑 収 入	25,550	97,683	△72,133
合 計	668,367	750,000	△81,633

### 支出の部

集 会 費	68,966	70,000	△1,034
会 報 費			
印 刷 費	178,422 ※	192,000	△13,578
送 料	40,000 ※	46,800	△6,800
運 搬 費	0	5,000	△5,000
小 計	218,422	243,800	△25,378
維持 費			
アルバイト費	260,000 ※	260,000	0
事務所借料費	84,000 ※	84,000	0
小 計	344,000	344,000	0
分 担 金	15,000	15,000	0
通 信 連 絡 費	53,020	55,000	△1,980
事 務 ・ 消 耗 品 費	12,000	20,000	△8,000
予 備 費	7,500	200	5,300
合 計	718,908	750,000	△31,092

(収入)668,367円-(支出)718,908円=-50,541円

△…予算より減 ※…予定額を含む

### <パンフレット会計(含書籍分)>

収 入 の 部		支 出 の 部	
前年度繰越	110,378円	送料	810円
売上	43,630円	新しい本編集費	56,686円
雑収入(利息)	22円	計	57,496円
計	1,147,530円		
エイボン教育賞副賞 (9～10ページ参照)	500,000円		
計	1,647,530円		
残 高	1,590,034円		

☆このあと、本の製作のため高額の支出があります。製作費を負担して定価をおさえます。本を贈呈することも予定しています。

会費未納分が多いため一般会計は赤字になっています。まだの方はすぐお送りください。  
会報はこれで最後ですが、'96年度の決算と四月一日以降の残務処理の会計については、まとも次第報告いたします。

成五年三月八日に通知した。教育課程は学校長が編成するものではあるが、弾力化の方向が進学指導に傾斜することは趣旨に反するというもので、また家庭科のみが対象となるのはどうかということでもある。」と平成七年十月の高校長協会家庭部会・研究協議会で述べた。また平成八年二月同・研究協議会および五月同・総会において、文部省初等中等教育局職業教育課長池田氏は、「私もいくつかの実践がおこなわれていた。皆生き生きとした実践が聞こえていた。一部には、四単位履修についての弾力化をとの声を聞かれるが、私の見る限りでは男子も十分にがんばっており、今後は、定着されることが必要と考える。」「一部で家庭科の単位減の声もあるがこの姿を見ると今後も確実に実施していく必要がある。私学の一部においては特別扱いしてもよいのではという男子校からの話もあるが、正当な理由のないところへはきちんと指導していく考えである。」「現在中教審で審議されている週五日制については、教育課程全般にわたって検討されることであり、今は家庭が本来の機能を回復するための教育が必要である。人生八十年を生き抜く力と高齢化社会を支え、情報化社会の中で適切な情報を活用できるようなグローバルな視野に立つた生活ができるようにするために家庭科は実践

## このプランを生かそう！

男女共同参画2000年プラン

男女共同参画社会の形成の

促進に関する平成12年度までの

国内行動計画

半田たつ子

国連を中心とした世界規模の動きと軌を一にして、政府は国内行動計画を策定し、その改定も行ってきた。平成六年には婦人問題企画推進本部を改組し、首相を本部長、官房長官・女性問題担当大臣を副本部長とし、全閣僚を構成員とする男女共同参画推進本部を設置、首相の諮問機関として男女共同参画審議会を置いた。同年八月、男女共同参画社会の形成に向けて21世紀を展望した総合的ビジョンについて諮問を受けた同審議会は、広く国民の声を聞くために、論点を整理して一昨年十二月公表。各方面の意見・要望を取入れ、おおむね2010年までを念頭に、昨年七月「男女共同参画ビジョン」を答申した。

一方、第四回世界女性会議で「北京宣言及び行動綱領」が採択され、2000年に向けて取り組むべき優先順位を示した上で、その実施に向け、各国が1996年末までに自国の

行動計画を作ることを求めた。

「参画ビジョン」を受けた政府は、昨年九月、有識者や各団体の代表者から成る、男女共同参画連携会議（えがりてネットワーク）を発足させ、同会議は、十二月十二日みだしの「プラン」を答申、十三日の閣議で決定した。

十二月二十五日、総理府で開かれた説明会で共同参画室の名取はにわ室長は「論点整理公表の十二月から翌年二月まで、千百件以上の意見が寄せられた。『プラン』は北京会議行動綱領と一般公募した意見に基本を置いた」と強調、会場からの評価の声も高かった。今後も「えがりてネットワーク」の活動を通して広く意見交換・広報・啓発を行い、地方公共団体やNGOと連携し、会議や催しを通して意識の浸透を図る。市町村が男女共同参画宣言都市になることを推奨し、宣言都市を継続的に支援するという。

内容も政策・方針決定過程への女性の参画を、およそ十年で30%に、2000年までのなるべく早い時期に20%を達成できるよう努める、など具体的であり、無償労働、介護保険制度、売買春、セクシュアル・ハラスメントなどに言及。メディアが女性の性的側面を強調する問題や、インターネット等のルールを確立すること、リプロダクティブ・ヘル

ス／ライツ、HIV／エイズ等々、今日的課題に目配りしている。教育では「初等中等教育の充実」の具体的施策の中に「家庭教育の充実」として次のように述べている。

「家庭教育については、平成元年3月改訂の学習指導要領に基づき、男女が協力して家庭生活を築いていくという視点に立って教育内容の改善・充実を図るとともに、高等学校の家庭科については、社会の変化や女子差別撤廃条約の批准に対応するため、平成六年度新入生より男女ともすべての生徒に履修させるよう改善したところであり、その趣旨の徹底や教員研修の充実、施設や設備の整備・充実等に努める」（個別の教科への言及は、家庭科のみ）

今、21世紀初頭をめざす学校五日制完全実施をめぐって、教科の統合や時間数など様々に取沙汰されている。私達は「プラン」の性格や位置付けを理解し、政府が最重要課題として提起した「プラン」を、足下から崩さない行動をとるべきだと思う。狭い視野から家庭科の時間数減や選択教科化を阻止するだけの行動を、個人はしたくない。かつて家庭科選択者の減少に危機感を抱いた家庭科教師が「女子必修」の枠をはめて安定させた轍を踏みたくない。「プラン」を強力な武器として生かす行動こそが必要だと思う。

## 半田たつ子さんに

### 「エイボン教育賞」

樋口恵子

一九九六年度エイボン女性賞の教育賞を半田たつ子さんが受賞され、その贈呈式が昨年十月三十日、キャピトル東急で盛大に開かれました。受賞理由はもちろん「家庭科の男女共修をすすめる会」の世話人として、「家庭科教育」の編集長として、またみずからウィキ書房を設立して「We」誌を発刊、家庭科共修という切り口を通して、この社会の再生に向けて提言しつづけた功績に対するものです。

ご承知のように、家庭科の男女共修をすすめる会は、目標を達成して解散します。専門家ばかりでなく、故市川房枝さんはじめ、家庭科の今日的意義を認識し、その共修こそジェンダー社会の枠組を変え、生活の質を高める鍵として、活動に参加する市民が数多かつたことが特徴的です。半田さんはいつもその中核にあつて、家庭科の内部から家庭科を変える、という最もむずかしいポジションをめぐりに守り通しました。市民運動という幅

広いひろがりでの男性の賛同者が少なくなかったこと、国際婦人年以来の女性解放運動が追い風となったこと、とくに女子差別撤廃条約第一〇条がキメ手となったこと、などこの活動はまさに時代に適ったものでした。時代の水路を開きながら、時代を先取りし、新しい時代をつくる人々と共に歩んでいきました。

とはいえ、いつの時代もまたどんな分野であつても、最も頑迷固陋なのは、その内部にいる人々です。校長会の家庭部会、その背後の文部省、その仲間の高校PTAなどの最後のまでの抵抗はすさまじいものでした。家庭科の当事者として、内部から問題提起し、この会の中心となった半田たつ子さん、現職教員として現場の声のまとめ役を果たした和田典子さんはじめ、家庭科ご出身の世話人の方々にあらためて敬意を表したいと思います。

半田たつ子さんが「家庭科教育」編集長だった時代に、私は一執筆者として声を掛けていただきました。世話人の方ならだれでもご存じの「水茎のあと麗しく」という美しい文字で（実際は毛筆ではありませんでしたが）、便箋何枚もにいつぱいの熱意あふれる依頼状を頂戴しました。まるでラブ・レターでもい

半田さんの誠意あふれる名文と、これから何か新しい時代が始まるという確かな予感があったからだと思います。あれから半田さんご自身の人生に、公私ともにさまざまなことがありました。私財を投じて「We」誌を創刊し、追い風とはいえないがらきびしい経営の中で、全国の仲間より所となつて下さいました。よき理解者であつたご夫君を亡くされた悲しみの淵に、半田さん自身も沈んでおられます。その中で家庭科の男女共修運動のシンボルとして半田さんが受賞されたこと、皆様とともに心よりお祝いしたいと思います。

エイボン女性賞は、大賞のほか功績賞、教育賞、芸術賞、スポーツ賞の各分野で活躍した女性に贈られます。私は三年前からこの審査（六名の女性の一人）にあたらせていただいています。ことし教育賞ではこの方しかいない、という満場一致で半田さんに決定しました。文字どおり女性による女性のための女性の賞で、まことにふさわしい方が選ばれたと思います。この賞の特徴は、受賞者への賞金と同額（五〇万円）が受賞者の指定する団体、組織へも贈られることです。半田さんは家庭科の男女共修をすすめる会を指定され、活動記録出版の一助となることになりました。半田さんにあらためて御礼申し上げます。

と思います。

受賞当日、半田さんは濃いグリーンのロング・ドレスにラメのストールを掛けて、終始とても美しく、優雅で、ユーモラスで、堂々としていらつしやいました。活動内容をご紹介するビデオで、半田さんが共修経験をした男子高校生の感想として「男は仕事女は家庭というのは法律で決まっているのかと思った」というあたりでは場内に笑いがあふれました。

審査委員の中での役割は輪番制なので全くの偶然ですが、今回は私が賞状を読み上げ贈呈する役割でした。半田さんのお名前と家庭科共修への貢献を讀める文言を読み上げ、半田さんの瞳を見つめながらお渡しするという光榮を担えて、つくづく幸せでした。成功裡に終わったこの活動を讀え合い、半田さんの業績をたたえ、未来を拓く力になったことを心より喜びながら、ご報告させていただきます。

男女共同参画二〇〇〇年プラン（８ページ参照）は、政府刊行物を扱う店で買えます。前に審議会が出した男女共同参画ビジョンと一冊になっていて千円です。

## 「エイボン教育賞」を

いただいて

半田たつ子

一九四三年秋、苛酷な戦況下、若者を一年でも早く使うために、国家は中学・高等女学校生が四年終了で上級学校に進学できる特例を設けた。私はちょうど四年生、英語が大好き、国語も数学も好きな私が、家庭科に進学してしまったのは、この制度によって現実を脱出したかったからだ。戦時下にも青春の懷疑はあり、私は自分をもてあましていた。

日本女子大に進んだ私は、すぐ後悔した。家政学は「学」の名に値しないと思った。敗戦の日を境に、思想を一八〇度変えた教師を軽蔑し、「先生」にだけはなるまいと決意してもいた。「家庭科の先生」は、私の人生の青写真に、チラとも存在しなかった。

不在地主のため、家族が引上げていた父の郷里に連れていかれて、やむなく「先生」になった時「生徒にウソをつかない教師」でありたいと自分に誓った。魅力の乏しい家政学

を薄めた家庭科を教えるわけにはいかない。学ぶに値する家庭科を創りたい。これが十九歳の私の出発点だった。

一九九六年エイボン女性年度賞「教育賞」を、との電話を受けた時、家庭科男女共修の実現に對してなら、先輩の和田典子さんに、また世話人のあの方、この方に、と思った。がその瞬間、私の人生がパッと浮かび、「ありがとうございます」と返事をしていた。望ましい道でなかったけれど、意味を求め、意義あるものにしたくてひたすら生きた、そのことを認めてもらったと思った。

教育賞のレリーフには「女子向き実用教科としての家庭科の固定観念を碎き、男女が共に生き方を学ぶ教科とする視点で20余年に亘り尽力し、高校の家庭科男女共修を実現させた啓蒙活動」とある。女性の役割を家庭に縛りつけた実用教科：家庭科を、人間らしく生きる・暮らすことを学ぶ教科に刷新した、との受賞理由がうれしい。

10月30日のディナーレセプションには、会の仲間がかけつけてくれた。

大賞を受賞された日本物理学会会長の米沢富美子さんは、三女の母でもあって、「家庭科男にも！」に強く共感されたのは当然だろう。三人目がお腹にいる芸術賞の藤家溪子さ

んが、こんなことを話した。初めての妊娠の時アメリカで暮らしていた。夫婦そろって病院に行くのが当り前、医師は夫に向かって注意事項などを話す。九か月で帰国したところ、日本の医者はお母さん、お母さん」を連発する。初めは自分のことと思えなかった。夫は側にいるのに無視され、むくれてしまった。ああ、これが日本だ！と思った。でもこれからは変わりますね、と。

運動成就の喜びを共感して下さる方々の中には、初めて言葉を交わす例えば下重暁子さんなどいて、男女共修の家庭科の誕生を、意外と思う方々も心から祝福して下さいました。運動の普遍性を実感でき、幸せが倍増した。

私がもし、家事・裁縫の好きな生徒だったら、先生が憧れの職業だったら、女子必修家庭科を教えることに疑問を持っただろうか？嫌いだつたから、それを教える自分を肯定するために道を捜した。やがて家庭科には他教科にはない「何か」があると確信、それをつきとめようとした。発見した「何か」に世の理解を得、制度を変えるのに40年かかった。後半は仲間とともに、幸い追風も吹き、楽しい道程だった。中嶋里美さんの「共修運動のフィナーレ」との言葉がうれしい。

逆境の中でエネルギーが生まれ、苦境の中に

宝が潜む。仲間とともにそう思えることが何よりもうれしい。

NHK

## 「おしゃれ工房」に

出演して

磯部幸江

私は、この番組が、女性向けの教養番組で物作りを紹介するものだと思っていたが、テキストを見て、スキーや個人輸入のノウハウなどがあり、時代が変わってきているのを、まず感じた。

であるから、「中学校で製作をしていること、男子も取り組んでいること」をぜひ紹介したいという申し出に、私からもぜひ出たいと返事をしたのである。

放映は、一月二十八日。テーマは「彼とおそろい手づくり下着」。チーフプロデューサーは、女性の方で、このテーマでは、単にトランクス縫い方の紹介だけでなく、下着の変遷や中学校での取り組みも紹介して、内容に広がりを持たせたいという考えであった。生徒や私へのインタビューなど一時間ほど

かけて録画撮りをした内容をどのように編集するのか興味があった。放映された内容を見て、NHKも努力しているなあというのが、所感。中学校の教科書を見せながら、学校では男女一緒にショートパンツを縫っていること、手づくりに積極的に取り組み、それを着用している生徒たちの様子がよく撮れていたことなど、中学校の家庭科のよい宣伝になったと思う。でも、ねらいが男の子の裁縫というのにあったのか、男の子ばかりが強調されてしまったこと、また、テーマタイトルのつけ方が、彼とおそろい手作り下着とあり、女性性が男性のために作るものという意識が現れていたことが、裁縫は女性の仕事という固定観念から抜け出せていない限界が感じられる。しかし、司会者が、お裁縫は女性の仕事という観念がなくなっていくのはいいですねと、中学生たちの様子を見て言っておられたのは心に残る。

職場では、同僚や保護者、生徒たち、多くの人たちにテレビに出ていたねと声をかけられた。そういう人のつながりもうれしい。

新聞、放送などには、これからも積極的に働きかけていきたいと思います。（編集部）



国際婦人年日本大会の  
決議を実現するための

## 連絡会報告

梶谷典子

96年四月から97年二月までの活動について  
簡単にお知らせします。

今年は大きなイベントはありませんでしたが、各委員会を中心に関係方面への要望などは活発に続けられました。

「男女共同参画二〇〇〇年プラン」(8ページ参照)が出た時は、男女共同参画室の名取はにわ室長の説明を聞きました。これから各委員会でプランについての検討をすすめます。

◇  
要望、意見等の主なものは○民法改正(夫婦別姓、非嫡出子への差別をなくすなど)。○婦人少年室の存続。○従軍慰安婦は商行為」という発言への抗議。○均等法への意見。○NHKへの要望(後述)。○児童福祉法(性的搾取行為の禁止を盛りこむ)。○総選挙にあたり、女性の当選を確保するよう各党へ。○女性問題

担当大臣と女性行政の強化。○公的介護保険制度について。○新教育課程について(後述)など。

◇  
最近連絡会で大きく話題になっているのは「後向き」の動き。従軍慰安婦のことを教科書に載せるなどという動きは新聞等で大きく取り上げられています。夫婦別姓反対の動きも強くなり、各地の議会でも次々と反対決議が行われています。大都市周辺では推進決議もありますがこれは全くの少数派です。この問題に限らず、「前向き」の運動はもっと強めなければいけないのではないのでしょうか。

### 教育マスメディア委員会

96年度になって、座長が「会」の和田典子世話人から新日本婦人の会の井上美代さんに交替、梶谷が参加するようになりました。

マス・メディアに関連しては、十月三日にNHK会長を訪問して要望書を渡し、女性を差別する表現をなくすこと、女性を登用すること、女性の意見を十分取り入れること等を求めました。

今後民放も訪問する予定で、各局の番組を手分けしてチェックするとともに、要望内容の検討を始めています。

## 世話人会報告

96夏号で報告したあとの世話人会は次の十三回です。

五月二十五日、六月二十九日、七月二十日、八月九日十日(合宿)、九月二十八日、十月一日、十月十九日、十一月三十日、十二月二十三日、一月十八日、二月八日、三月一日、三月二十九日。

十一月までの八回は、殆ど新しい本「家庭科、男も女も!」をつくるために時間を使いました。

五月、六月には本の内容、体裁、スケジュール、資金などについて検討し、執筆にかかりました。

七月から十月までは、原稿を持ち寄って、内容、文体などの調整を続けました。

特に、八月は九日、十日と二日間にはわたって東京ウイメンズプラザで作業を続け、夜は近くのNHK青山荘に泊りこみました。この時に題名、発行部数などを決定しました。

九月には半田世話人のエイボン教育賞受賞の報が入り、副賞五十万円を「会」がいただく。

けることになりました。本のこととは別に、新しい教科書に対して要望書を出すことを

九月の世話人会で決めました。(3ページ参照)

十月には、三月に本を発行することを確認、贈呈先、宣伝方法などの検討を始めました。

十一月には原稿はすべてでき上がり、要望書、決議文等の資料の扱いについて討議しました。始めはなるべくたくさん資料を入れたと考えていましたが、ページ数が多くなりすぎるので、出版社からは資料集を別冊にしてはどうかという提案がありました。討議の結果、予算や販売のことを考えて、資料を少なくして一冊にまとめることにしました。

十一月からは会報やパンフレット等の残っているものをどうするか、解散したあととどうしても仕事が残るのでその処理をどうするか、などの検討を始め、十名の世話人(20ページ参照)が残務処理にあたることを十二月に決定しました。

十二月の世話人会では「男女共同参画二〇〇〇年プラン」に、家庭科教育の充実の項目がしっかりと入っていることを喜び合い、会報春号の内容を検討、新しく始まった「ジェンダーと表現の会」、これから始まる「男女平等教育フォーラム」(のちに「男女平等をすすめる教育全国ネットワーク」と改称)の紹

教育については、七月の中教審第一次答申を検討したのち、新教育課程に向けて要望を出すことにしました。文部大臣に会って要望するつもりで準備をすすめていましたが結局面会ができず、文部省が「今後の教育の在り方について」意見を募集していたのでそれに応募するかたちでFAXを送りました。

要望した項目は次の通りです。

- 一、人権・平等・平和を基本にすえて、社会の主権者として「生きる力」を培うことを教育課程全体に位置づけること。
- 二、小・中学校の教育課程は、国民的教養として、その基礎・基本をすべての児童・生徒が共通に習得できる内容にすること。
- 三、教育課程編成にあたっては、「子どもの権利条約」の理念が全課程に位置づくようにすること。
- 四、教育課程編成の基本に「女子差別撤廃条約」の理念を明記し、男女平等の視点を全教科および教科外活動に明確に位置づけること。
- 五、学校教育の「ゆとり」を確保するためには、一クラスの子どもの数を減らすとともに、教育にたいする管理統制を撤廃すること。

介(17・18ページ参照)がありました。夜は「望年会」として、フランス料理のテーブルを囲んで、これまでの運動を振り返りながら今後についても話し合いました。

一月には本の贈呈先について検討するとともに、会報の全号完全版を国会図書館、国立婦人教育会館、市川記念館資料室に贈呈することを決めました。会報最終号と96年度会計についても話し合い、会計の最終報告のために、別にお便りを出すことにしました。また、教課審が意見を募集しているので、ひとりひとりが意見を出そうということになりました。

二月には教課審の審議状況が特に話題になりました。「家庭科を選択に」という声が高P連からでているが文部省はどう思っているだろうか話し合い、「会」としては「二〇〇〇年プラン」に関連づけて家庭科教育を一層充実させるよう要望書を出すことにしました。(4ページ参照)

三月の世話人会ではようやく本の発行日、ページ数、値段などが確認でき、解散挨拶状の出し方などもきまりました。

記録 芦谷薫、磯部幸江、近江真理、中嶋里美、八島紀子

記録・まとめ 梶谷典子

## これから

— 世話人の声 —

皆様はこれからの人生を、これからの日本の社会、教育、家庭科を、これからの運動をどのように思い描いていらっしゃるのでしょうか？「会」の解散にあたり、過去を振り返るより未来をみつめてみませんか。

「会」で学んだことを心にとめて

青山和世

いろいろな考え方の人たちが、家庭科の男女共修を実現したいという熱い願いを持ち続けて、この一点で共通理解をしながら行動してきた。一つの行動に向けて意見が異なることも少なくなかった。しかし、議論を尽くして決まったことについては、速やかに行動に移ることが常であった。

人格を尊重しつつ行われるこのような過程が私にとっては、いつも感動の連続であったのだ。

「会」で学んだことを心にとめながら、これから行動していきたいと思っている。

これから「家族に頼らない生き方」ができる社会にしたい

石川由紀

家庭が崩れていく、と嘆く人が多い。その人たちのいう家庭とはどんな形態で、どんな機能を持ったものだったのだろう。私の推測するところでは、家庭内役割分業がきちんとできていて、各自がその役割をこなしていれば、とてもよくできたシステムなのだろう。

核家族化、少子化の中で、私はそのシステムの危うさを知ってしまった。そして現実とは合わなくなってしまった法律を、意識を変えなければ、と切実に思っている。どのような生活環境になっても、人としての尊厳を保って生きていきたい。そのためには、多くの人の力も借りなければならぬ。だから、だれもが借りれるシステム作りをしていきたいと思っている。

家庭科のこれから

磯部幸江

中学校では、技術・家庭科ではなく、「家庭科」で存在し、専任の教員が必ず配置され、週二時間を確保し、整備された家庭科室で、

男女共に「自立した女と男を、人間らしい生活を」めざす授業をする。これが家庭科教師としての私の願い。二十数年前初めて教壇に立った時は、女子のみの授業だった。今は、男女共に学ぶのが当たり前。授業内容もいろいろ制約はあるが、創り出すことはできる。

しかし、教科として技術と家庭は半人前。別々の教科として独立する手だてを探りたい。決まっている事だからとあきらめないで、声を上げたい。有効な手だてもわからないのだが、同じ思い持つ人々の輪を広げ、動かししていく努力を続けたい。

これからも私はこう生きたい

榎本稲子

一、すべての本は健康にあると思う。と言っても七十五才も過ぎれば老化は避けられないがその進行を鈍化させ、不注意にする病気やけがをしないような生活の実践をする。

二、経済的に自立した生活が続けられるよう工夫し、政治で変えられる医療、保険、税金等については反対の意志を表示し、行動する。

三、高齢者問題、人権問題等社会と関連のある学習や活動にできるだけ参加する。

四、自分の幸せな生活が続けられるように追求していきたい。  
こう考えてきたら、今までと変わっていない。

共修家庭科を定着させたい

近江眞理

先日、「人口爆発は何を問う」という新聞の社説が目についた。一人当たりのエネルギー消費量は、日本はバングラデシュの六二倍という。日本は少子化が言われて久しいが、人口問題は人の頭数にあるのではなく、一人当たりのエネルギー消費量が環境に与える影響、つまり消費爆発こそが問題なのだ。いわゆる先進諸国は軒並み一人当たりの消費量が多い。利便性や効率性を優先し、自国のエゴだけでは、もはや地球と共存できなくなってしまう。個人の消費生活が大きく社会と関連していることを考えながら、生活をしていかなければならない現代こそ、家庭科を男も女も学んでいく必要がある。必修教科として位置づけ、定着させていきたい。

家庭科を教育の中心に

香川敦子

家庭科が形だけは普通の教科になって私たちは運動の幕を閉じるけれど、終点などとはとんでもない、これから、このひよわな新生児家庭科をかかえて、日本の教育は荒波を乗り切らなければならぬ。しかも今までのところが、個の自立した生活を可能にする教科家庭科として教育の中心に座らせなければならぬ。なぜなら、高齢化社会が普通の社会となると、社会的な介助や福祉の必要性は深くなる。あわれみをかけるのでもなく、厄介ものを背負うのでもなく、家族の絆で支えるのでもなく、その個々の人の自立を、欲求を、社会が支えるのである。このことが、教育の中で礎としてすえられなければならない。家庭科がその担い手であることを信じてい。

やはりこれしかない

柴田栄子

私は「すすめる会」が発足したころ、高校家庭科教員として再出発した。新米教師の精神的支柱になったのは「すすめる会」をはじめとする共修に向けての情報であった。「家庭科を共修に」という運動に連なっていることは、家庭科教員としての私に張りとう希望を与えた。

すべての場を女、男半々に

中嶋里美

これからやりたい運動は――

一、腐敗につながるおんどり多数のリーダーシップ。議会、審議会、協議会、委員会、企業、官庁、学校等々あらゆる組織のリーダーを女男半々にする運動。その第一歩はあらゆる女達の意識から「女だから仕方がない」の考えを捨て去ること。

二、すべての学校に男女平等教育係の設置を。出席簿、男女別学校、教科書記述の男性偏重、進路指導、教師の意識等々を変えるた

さて、あと数年で私の教師生活も終わる。これまでのどの年代を切っても新しい家庭科づくりに燃えていた……。家庭科教育とは？と求め、実践してきたと言える。

これからは……？ やはりこれしかない。  
仲間と始めた埼玉の「楽しい家庭科教育をつくるネットワーク」、組合の仲間との内容検討会を続けていくこと。「命と暮らしを学ぶ事」は生きるうえの基礎基本であると言うことを授業を通して広めること。

4単位必修修として位置付いた制度的安泰は束の間。寄りかかっているおれ、と自らを叱咤しつつ……。



めには、学校の中に男女平等教育係を設置し、「女が差別される時、男も大変な差別、個性の喪失がある」と学習することが必要。三、女性を差別する企業の製品の不買運動。男女雇用均等法の中には差別企業の公表も考えられているが、マスメディア、ミニコミ等を通じて差別企業をリストアップし不買運動をする。

### 教育のこれから

西原典子

教育の諸悪の根源は受験戦争にあり、これの解決には学歴優先社会をあらためることが先決である。今日的に重要な課題は人間性の豊かな子どもを育てることであるが、教育改革のたびにゆとりが失われている。中・高一環教育の構想もよいが、その前に30人学級を実現してゆとりある教育をすることが緊急の大事である。そのさなかに家庭科の男女必修が実現したのは幸運であるが、今回の教育改革で単位減や選択化など後退のおそれはないか。それは「家庭科冬の時代」の再来につながる大きな危険性をはらんでいる。「男女必修のチャンス」をより有効に生かすよう、また他からつけこまれないう、教育内容の

いつそうの充実が急がれる。

### 三つのこと

半田たつ子

家族や大勢の仲間は、私の人生を華やかに彩り、私を育ててくれた。でも私の中には、幼い頃から、いつも周りと微かなずれを感じ、私が住んでいた。緊急に取り組まなければならぬことが山ほどあって息を潜めていた「それ」が、今頭をもたげる。次の三つはまだ緒に付いたばかり。いつ実を結ぶかは分らないが、何をして十年単位の歳月が必要だろう。自分ときっちり向きあい、心ゆくまで対話しながら生きたい。

○コスモポリタンとしての学びと行動。  
○幼い人の心を豊かにほぐす活動。  
○配偶者を失って悲嘆にくれる人をサポートし、新しく生き直す力を生むグループ作り。

### 前進を

万城マキ

「すすめる会」の閉会は寂しいが和田先生提案の男女平等教育のネットワーク（17、18ページ参照）は賛成です。現場・進学校の家

庭科は本当に本当に大変でした。何しろ平等に扱われない訳ですから「おりしも国政、自治体、企業、到々国会議員の詐欺疑いによる逮捕には、この国は今まで何をしていたのか、これからどうやってゆくの、と案じられます。教育界でも官々接待、空出張、文書の偽造、隠滅等々蔓延し、身近な問題であるだけに心痛し、呻吟している者です。

そういう中であって、男女の平等も共学も一層求められることであって、今後とも若い人達と一緒にあって、不正一掃の大英断と改革に向けて歩みたいものです。進学校は新しいカリキュラム作りに向けて、またまた試験に立たされていますが、後退があつてはならぬと呼びかけたいです。今春退職です。この立腹をバネにして、生徒へ、世の中へ前進を長い目で求めてゆきます。

### これからも家庭科と関わりたい

八島紀子

学校の中で必修が実現して、本当にうれい。家庭科が、「生きていくこと」についていろいろな角度から考えていくことのできる貴重な教科だからです。

さまざまな問題をかかえている生徒たちと

いっしょに、「生活環境のこと」「男女平等のこと」「食育のこと」等、人間が毎日の営みの中で、一番大切にしていかなければならない問題を、みんなで話し合える時間をとることができるからです。

家庭科が、人間が生きていくために何が必要か、大事かを考える中心の役割を果たす教科であることを再認識し、これからもずっと勉強し続けたいと考えています。

「会」が解散したら、教育や男女平等の問題について考えたり運動したりする別の団体に参加しようとお考えになりませんか？（もういろいろな団体の活動に参加していられない方も多いでしょうけれど）

前から協力関係にあった「家庭科教育研究者連盟」「Weの会」は活動を続けています。

石川由紀世話人が主宰する「ひとりて生きるために単身者の生活を検証する会」（連絡先〇三―三七〇―一八五七―石川方）、駒野陽子世話人が代表世話人をつとめる「日本婦人問題懇話会」（〇三―三三七〇―三六六二―駒野方）、樋口恵子世話人が活動をすすめる「高齢社会をよくする女性の会」（〇三―三三五六―三五六四）、それに新しく始まった、始まるうとしている運動もあります。

### 参加なさいませんか

家庭科の研究・実践は

家教連で一緒に

武市成子

家庭科教育研究者連盟は、三〇年の歴史をもつNGOでただ一つの、自主的な家庭科研究の組織です。現在の会員数は小・中・高・大学の現場教師を中心に約1000名で、年次の夏期全国集会、各地での研究会（すべて公開）を毎年数回開いています。

また月刊「家庭科研究」を編集・発行し、会員による出版物もたくさん出しています。会の目的に賛同し入会金五〇〇円と年会費三〇〇〇円（希望者は月刊誌の予約購読料、年八五五〇円）を納入すれば入会できます。

「連盟」がいま力を注いでいるのは、共修にふさわしい家庭科の内容や方法の追求と、魅力があり力がつくいきいきした授業の実践です。「すすめる会」にかわる共修運動の拠点にして頂くよう入会を歓迎しています。

（事務局）〒198 東京都青梅市柚木町

一―200―2武市成子方

FAX 0428―76―0932

Weの会

磯部幸江

「家庭科で何を学ぶ？」「生徒と共にどんな授業を創る？」という問いを探る雑誌「くらしと教育をつなぐWe」は、六年目を迎える。様々な分野で活躍する人の生活や人生観、家庭科教員の授業への思いや実践など、「女と男の家庭科新時代」を創るために誌上での交流を深めている。また、We誌にはさみ込まれる「家庭科屋台村通信」は、家庭科をめぐる多くの情報、本音が生かされ、元気の出るネットワークである。（連絡先〒655神戸市垂水区狩口台4―24―101 西本和代）Weは、これからも雑誌を通して教育に関心を寄せる市民と共に家庭科への応援を続けていく。

年一回、読者を中心に集う、We夏季フォーラムは、八月一日―三日まで「北海道の大地から」と旭川パークホテルを会場にして行う。家庭科関係の分科会も多数準備中。問い

合わせは、Weの会事務局の磯部まで（TEL〇四八―六四一―三七六五）

### 男女平等教育のために連帯を

駒野陽子

小・中・高、どこでも家庭科が男女共修になって、これからは男女平等教育はもう安心！というわけにはいかないのが日本の学校。

明治以来の学校独特の慣習―例えば、男女別出席簿、儀式やスポーツ大会などでの男女別役割など。また先生や親の意識、マスメディアの影響などで、中・高校生にはまだ越えられないジェンダーのハードルがいつぱい。

でも、女の先生が中心になって、学校を完全なジェンダー・フリーの場にしていくのがこれからの課題。共修の会はなくなっても、会員だった現職の先生が全国にいる強味を活かして、男女平等教育のために連帯していきたい。教研の女子教育分科会、各地の高教組女性部などとタイアップして、新しい活動の場を創りませんか。日本婦人問題懇話会には教職の会員が少いけれど、みなさんが入会して教育分科会を作ること可能です。有志のみなさんのお声を期待しています。

### 「男女平等をすすめる教育

全国ネットワーク」をつくります

和田典子

◇男女平等をすすめる教育は求められている  
「すすめる会」が国際婦人年連絡会に加盟してから約二〇年、わたしは「連絡会」における「すすめる会」の窓口として、他団体と協力して家庭科の共修運動をすすめてきました。また、教育・マスメディア委員会の座長も引き受けさらに広い視野での活動にも参加してきました。家庭科の男女共修が実現したのも「連絡会」などの幅広い組織的な連帯と支援のおかげでした。これからも、世界女性会議などの国際的な活動がふえ、国内組織の団結はいつそう求められることでしょう。

#### ◇北京会議をうけて

北京におけるワークショップのテーマも教育にたいする関心が高く、採択された「行動綱領」でも教育は、メディア、人権、少女とともに重要問題領域として特記されています。

日本でもいち早く「NGO日本女性会議―連絡会主催」をひらき二一世紀にむけて「NGO行動目標」を策定しました。（一九九五年一月）こうしたNGOの動きに呼応して、

### 教育とメディアを変えるために

梶谷典子

家庭科の教科書の挿絵に出てくるのは女ばかり、ということはありませんでした。でも、伝統的な性別役割分担意識や、男女についての古い固定観念に基づく表現が教科書や参考書から消えたとはいえません。先生の性差別的発言が気になる、ということもあります。そうした差別的な表現をなくしたいと思う方の役に立つようなリーフレットをつくりました。

「性差別的表現にご注意を!!」と題した、A4を二つ折りにしたもので、表には「性差別表現とは何か」ということ、中のページには問題になる表現の具体例、裏には男女平等について日本が遅れていることを書きました。

メディアを対象としてつくったもので「メディアで働く皆さん!」と呼びかけていますが、教育の場でも参考にしたいだけとありがたいと思います。メディアに関心をお持ちの方も多い筈ですが、メディア関係者に配ることに協力いただければもっとありがたいと思います。

政府もさる一二月、二〇〇〇年にむけての「男女共同参画プラン」を発表し、「国民各層との連携を深めつつ計画の実現につとめたい……」との期待をよせています。

#### ◇男女平等をめぐるわが国の状況

さて、国際婦人年発足以来すでに二〇年を越え、差別撤廃・固定的性別役割の排除についての認識は漸く浸透してきました。また、男女平等をすすめる教育・学習が大切だとの声も高まってきています。しかし、社会慣行や人々の意識にはまだ旧いものが根づくく残り、新たな男女差別さえ生まれています。

たとえば、女子にたいする就職差別はむしろ深刻さを増し、セクハラもあとをたたず、「個性にあった教育」という名による男女別学体制の心配もあります。また、進路指導もまだまだ保守的です。そのほか、教科書執筆者の大多数は男性で、「道徳」の教科書に登場する人物まで男性に偏っています。

マスメディアにおける少女・少年、男女関係や家族の描写もステレオタイプが多く、とりわけアダルトビデオやポルノ漫画・雑誌の人権侵害には目にあまるものがあります。

#### ◇これからとりくみたいこと

「すすめる会」が力を尽くしてきた家庭科共修運動は目的を達成しました。家庭科の共

リーフをつくったのは「ジェンダーと表現の会」。今のところ、誰が会員ということもはっきり決めず、動ける人が連絡を取り合ってリーフを配っているという小さなゆるやかな集まりです。連絡の中心は「会」の坂本ななえ世話人、中嶋里美世話人、伊藤恭子元世話人ほか。将来はもっと詳しいパンフレットをつくったり、メディアに対していろいろな働きかけができれば、と思っています。

参加してくださる方、リーフをご希望の方は中嶋世話人（FAX〇四二九―四二一七五六〇）か梶谷（FAX〇三―三四四―四二一五二）にご連絡ください。リーフは一枚10円（定価ではありませんが）でたくさん買って配っていただけるとありがたいのですが。

◇

もうひとつ団体をご紹介します。

「ジェンダーの視点で教育を考える会」は、ジェンダーの視点を持った教員を養成するため、審議会に働きかけることを中心に活動すすめています。連絡先は村松泰子さん（〒168 東京都杉並区高井戸東二―二五―一―四〇三）  
☎FAX〇三―三三三―一六八九  
一、情報はJJネットニュース（FAXによる女性の問題のニュース。連絡先FAX〇三―三八二―〇〇八二）で流れます。

修が、性別役割意識を変革し、家庭・社会を前進させる突破口になることを確信しつつ「会」は解散することになりました。しかし問題はまだ残されており、また、共修が男女平等を約束するものでもありません。

ところで、男女平等を教育・学習の面から追求しようとかねてから各地の教育現場ではさまざまな研究実践も進められて来しました。

たとえば別学を無くすとりくみや男女別名簿の廃止、ジェンダーにとらわれない進路指導、性教育の開発、教科書の検討など。そのほか女性史の教材化、共修にふさわしい家庭科の研究なども前進し、成果も挙がっています。またメディアに対する関心も高まってきています。しかし、政策や施策、社会条件の整備に影響を与えるほどには育っていません。

こうした努力や成果を、男女平等をすすめるために交流・整理し、実効ある行動・計画に反映させ提言もしたい、そのためにネットワークをつくりたい。

これが、私のこれからやりたいこと・やらねばならないことだと考えているところです。同じ志をもつ方々のご参加を期待します。

和田にご連絡ください。

〒151 渋谷区西原二―四―一〇

☎FAX〇三―三四六―二六六五

# おしらせとおねがい

◆十名の世話人が残務処理にあたります。

「会」は三月三十一日に解散しますが、本の販売等、事務的な仕事は当分残りますので、首都圏の十名の世話人が当分残務処理にあたります。

◆事務局はなくなります。連絡は世話人へ。

婦選会館の事務局はなくなりますので、婦選会館には連絡なさいませんように。連絡は左の十名の世話人をお願いします。

青山和世 ☎〇三三三三一九三三三四  
〒164 東京都中野区中野

五二四二〇一六〇二

荻谷 薫 ☎F〇三三三三〇七九六三七

〒182 東京都調布市東つつじが丘

三二六〇一七

磯部幸江 ☎〇四八八六四一三三六五

〒330 埼玉県大宮市東町二二二六八

榎本稲子 ☎F〇四八八三三三三三三三

〒336 埼玉県浦和市常磐六二七九

近江真理 ☎F〇三三三三八五一四六五

〒164 東京都中野区新井

一三六二二二〇一

梶谷典子 ☎〇三三三三三三三三三三

F〇三三三三三三三三三三

〒155 東京都世田谷区代沢一三三七八

中嶋里美 ☎F〇四二九四二七五六〇

〒359 埼玉県所沢市中新井一八九七二

半田たつ子 ☎F〇三三三三三三三三三三

〒182 東京都調布市西つつじが丘

二二二五二一四

八島紀子 ☎〇四八八五七七八二〇七

〒338 埼玉県与野市上落合

二二四二二二八〇七

和田典子 ☎F〇三三三三三三三三三三

〒151 東京都渋谷区西原二四一〇

(FはFAX、☎Fは電話とFAXが同じ番号)

◆振替口座は当分今のままです。

事務が残っている間は〇〇一九〇一九一八九一の振替番号は使えます。会費未納分がある方はこちらをお願いします。(九六年度会費は二〇〇〇円、九五年度以前の分は年三五〇〇円です。念のため。)

◆本のお申し込みはドメス出版へ。

新しい本「家庭科、男も女も!」のお申し込みは、2ページにありますように、世話人ではなくドメス出版のほうにお願いします。

◆もう一度最後のおしらせが出ます。

会報はこれが最後ですが、この会報には九六年度の決算は間に合いませんでしたし、九七年四月一日以降もしばらくは事務処理等がありますので、すべてが終った段階で、会計報告を中心とした簡単なおしらせを出す予定です。それがいつになるか、今のところ全くわかりませんが、お許しください。

◆それぞれのお立場で運動してください。

「会」は解散しても、運動はこれからも必要です。17、19ページにあるような団体に参加したり、地域や職場のグループなどで運動を続けてくださいますように。

国や自治体が一般の意見を求めることも多くなっています。機会を見つけて積極的に発言してください。ふだんでも意見は受けつけるはずですよ。文部省の男女共同参画問題の窓口は生涯学習局婦人教育課。担当は女性政策調整官鈴木優子さん。家庭科教育の担当は初等中等教育局職業教育課になります。文部省は東京都千代田区霞ヶ関三二二二一、☎〇三三三三八二二二(代)です。

各自自治体、各省もそれぞれ男女共同参画問題の窓口を決めていますので、確認の上、働きかけてくださいまいように。

(梶谷典子)